

## 第5節 神奈川県

### ルバーブ

#### 1. 産地の概要

ルバーブは特殊な香気と酸味のある葉柄を利用する野菜である。太くて多汁質の葉柄は、ジャム、パイなどに果物のように利用できる。ただ、葉身にはシュウ酸が多く含まれるので、食用にならない。

ルバーブは北欧や北米に栽培がみられる。たとえば、アメリカでは、ワシントン州、ミシガン州、オレゴン州などに、1982年では422haの栽培があった。

わが国では、明治初年（1870年頃）に導入されているが、当時は日本人の嗜好に合わなかったようで、定着はしなかった。その後、大正から昭和にかけて、長野県茅野市の原氏、長野県穂高町の勝野氏が栽培を始め、また避暑地としての軽井沢や信濃町野尻湖畔の外人村向けに栽培が始まった。また、塩尻市の上條氏は各種の西洋野菜を導入していたが、1951年頃よりルバーブの栽培を始めている。その他、長野県各地、北海道、岐阜県、群馬県、秋田県、神奈川県などに栽培地が点在している。

#### 2. 品種・系統および生育の特徴

ルバーブ (*Rheum rhaponticum* L. または *Rheum rhabarbarum* L.) の和名は食用大黄といい、漢方薬のダイオウと同属の植物である。原産地はロシア南東部からシベリア南部とされ、冷涼な気候を好む。

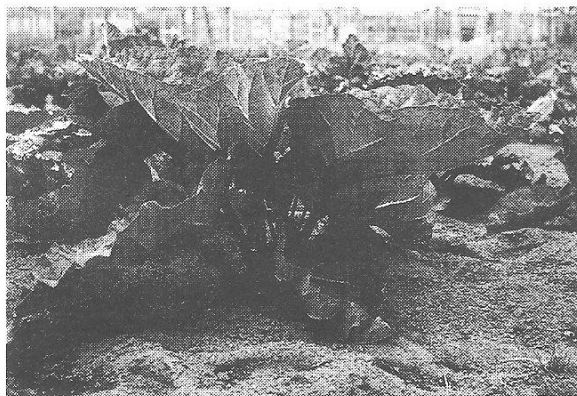


写真-1 ルバーブの草姿

ルバーブはタデ科に属する大型の多年生植物で、形状は多数の根出葉を着生し、葉は有柄葉である（写真-1）。葉長60~100cm、葉身は心臓形で、葉柄長30~50cm、葉柄の太さ3cm程度となる。根は放射状に伸長し、肥大する。食用とする葉柄は緑色を基本色とし、葉柄下部は暗赤色を示す（写真-2）。葉柄全体に赤色を呈する赤色系品種には‘Canada Red’、‘Valentine’、‘Strawberry’、‘MacDonald’ などがあり、赤色発現の少ない緑色系品種には‘Victoria’ などがある。‘Victoria’ は生育が旺盛で根の肥大がよいため軟化栽培に適し、軟化栽培では鮮やかな赤色を発現する。

神奈川県における‘Myatt’s Victoria’の年間の生育状況は次のとおりである。早春（3月上旬頃）にほう芽し、初夏（5~6月）に生育が最も旺盛となる。梅雨明け以降の夏には高温のため生育は衰える。秋（10月）になって草勢がやや持ち直すが、生長は緩慢であり、冬に向かい生長は停止し、12月中旬頃に地上部は枯れる。

#### 3. 栽培方法

ルバーブの栽培法は2つに分けられる。1つは露地で生育旺盛な季節に収穫する露地栽培であり、他は冬に根株を掘り取り、軟化施設内で生育させる軟化栽培である。

露地栽培の収穫法は、30~50cmに伸長した葉を基部より手で順次かきとる。一度に採葉しすぎないように注意する。その後、2週間くらいたつと新芽が伸長してく

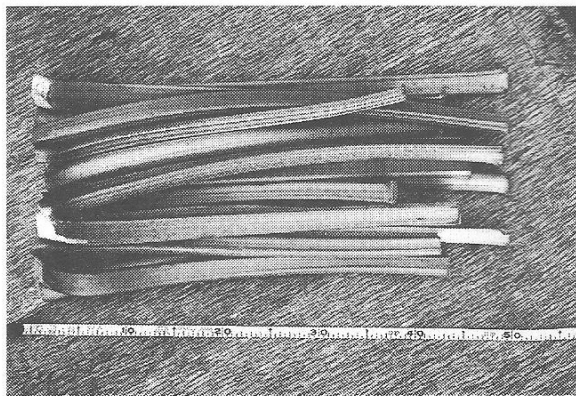


写真-2 食用とする葉柄